



Title	第4章 アイヌ文化の実践と内容
Author(s)	上山, 浩次郎; 世良, 尚也
Citation	『調査と社会理論』・研究報告書, 35, 71-96
Issue Date	2016-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/61405
Type	departmental bulletin paper
File Information	400_ch4.pdf



第4章 アイヌ文化の実践と内容

上山浩次郎 | 北海道大学大学院教育学研究院助教

世良 尚也 | 北海道大学大学院教育学院修士課程

はじめに

本章では、現在においてアイヌの人々が行うアイヌ文化の実践内容の特質を明らかにする。様々なアイヌ政策が進む中、再興の動きが進むアイヌ文化への関心も高まりを見せている。その点をふまえて、上山（2014）では、大規模なアンケート調査にもとづき、アイヌ文化経験の分化要因について検討を加えた。こうした試みは、アイヌ文化の再興の動きが誰によって担われているのかという観点から、そうした動きの内実を把握するという位置づけを持つ。

ただ、そうした具体的な担い手という観点と同様に、再興されつつあるアイヌ文化にはどのような特質が見られるか、という観点からその動きを理解することには重要な意味があろう。すなわち、再興されつつあるアイヌ文化は、過去になされてきたアイヌ文化と比べて、どのような特質を持っているのか。こうした点は、アイヌ文化再興の動きの内実を理解する上で重要な論点になると思われる。この点をふまえ、本章では、現在のアイヌ文化実践の内容が、過去に実践されていたアイヌ文化と比べて、どのような特質を持っているのかという点を検討する。

第1節 視点と方法

そこで、ここでは、インタビュー調査（調査の概要については序章を参照）から得られた生活史を活用することで、現在のアイヌ文化の実践内容の特質に検討を加える。すなわち、一方で、アイヌの人々が子どもの頃等に体験してきたアイヌ文化に関する言及から、過去のアイヌ文化実践の内容を明らかにし、他方で、現在において普段実践している、もしくは体験しているアイヌ文化に関する言及から、現在のアイヌ文化実践の内容について検討を加え、その上で両者を比較することで、現在のアイヌ文化の実践内容の特質を浮き彫りにしよう。

東村（1995）は、これまでの「アイヌ民族復権の歴史」を、「『開拓』によるアイヌ民族生活破壊期」、「『同化政策』の展開期」、「エスニシティ潜在期」、「民族復権運動高揚期」という4つの段階に整理している。ただし、こうした把握は、現在を適切に位置づけることができない。そこで、世良（2016）では、国連が1993（平成5）年を「世界先住民の国際10年」としたことや、1997（平成9）年に「アイヌ文化振興法」（アイヌ文化の振興並びにアイヌの伝統等に関する知識の普及及び啓発に関する法律）が制定されたことをふまえて、1993年以降現在を「アイヌ文化再興期」とあると提案した（表4-1）。

この点をふまえて、本章では、過去のアイヌ文化として、インタビュー調査協力者の生活史から推測することができる「エスニシティ潜在期」「民族復権運動高揚期」におけるアイヌ文化実践内容を再構成する。そして、それを現在におけるアイヌ文化の実践内容の特質を検討する際の参照点としたい。

表 4-1 「アイヌ民族復権の歴史」

東村（1995）	「『開拓』によるアイヌ民族生活破壊期」（明治維新～「北海道旧土人保護法」1899（明治32）年） 「『同化政策』の展開期」（「北海道旧土人保護法」1899（明治32）年～第二次大戦終了） 「エスニシティ潜在期」（第二次大戦終了～1960年代後半） 「民族復権運動高揚期」（1960年代後半～1993（平成5）年）
世良（2016）	アイヌ文化再興期（1993（平成5）年～現在）

この点を具体的に説明するために、「アイヌ民族復権の歴史」とインタビュー協力者の生活史との対応関係を示した表4-2を見よう。それを見ると、「エスニシティ潜在期」のアイヌ文化の実践内容は、「老年層」（60歳以上）の子どもの頃、また「壮年層」（40～59歳）のうち50歳代の子どもの頃の言及から推測することができる。他方で、「民族復権運動高揚期」のアイヌ文化の実践内容は「壮年層」また「青年層」（20～39歳）のうちの30歳代の子どもの頃、及び「老年層」が20歳～40歳代頃の言及等から「民族復権運動高揚期」のアイヌ文化の実践内容を推測できよう。そして、現在に対応する「アイヌ文化再興期」の文化実践の特質は、インタビュー協力者が調査時点または1993年以降に実践体験したアイヌ文化に関する言及から推測することができよう。

こうしたアイヌ文化の実践の特質を検討する上で考慮しておくべき点は、2008年に行ったアンケート調査の分析結果から指摘されているように（小内編著 2010：99-103）、アイヌの人々の中でもアイヌ文化の実践を行う者はそれほど多くはないことである。実際に、そのデータからここで対象とする調査地域を抜き出し度数分布を確認してみよう。表4-3と表4-4を見よう。表4-3にはアイヌの伝統文化のうち宗教儀礼的なものに関する実践体験の有無を示した。それによれば、5地域合計で見ても最も多く「現在も実践している」「カ．伝統的な先祖供養」でも11.4%と1割程度の者しか実践していない。また表4-4には、アイヌ語などの伝承活動・復興活動への関わりの有無を示した。5地域合計で見ても最も多く「現在関わっている」と回答されている「カ．祭事（カムイノミ等）」でも11.6%にすぎない。このように現在においてアイヌ文化を実践・体験している者は、アイヌの人々の中でもそれほど多くない。

また、過去に文化を実践していた者もそれほど多くは見られない。再度表4-3を見よう。そこで「過去に体験したことがある」という回答が最も多い「カ．伝統的な先祖供養」でも5地域合計で見ても16.5%にすぎない。また、表4-4から「かつて関わったことがある」を見ても、回答が最も多い「カ．祭事（カムイノミ等）」でも20.9%と2割程度である。

「過去に体験したことがある」「かつて関わったことがある」という回答選択肢の設計上、先にふれた「エスニシティ潜在期」「民族復権運動高揚期」におけるアイヌ文化の実践の程度を直接的には示しているとはいえない。しかし、そうした時期においても、アイヌ文化を実践していた者はアイヌの人々全体から見ればそれほど多くはなかったと考える方がよいかもしれない。いずれにせよ、アイヌ文化を実践する者は、アイヌの人々の中でもかなり限られているという点を念頭に置いた上で、アイヌ文化の実践の特質を検討する必要があるだろう。

それでは、以下から、調査対象地域間の相違も念頭に置きつつ、過去のアイヌ文化の実践内容を再構成し、その上で、現在のアイヌ文化の実践内容の特質を浮かび上がらせてみたい。まずは、調査時期順（むかわ町、札幌市、新ひだか町、伊達市、白糠町）に過去のアイヌ文化の実践内容の再構成を試みよう。

表4-3 宗教儀礼

	ア. クマ送り			イ. クマ以外の動物送り			ウ. サケを迎える儀礼			エ. 伝統的な婚礼・葬儀			オ. 伝統的な地鎮祭・新築祝い		
	過去に体験したことがある	現在も実践している	合計	過去に体験したことがある	現在も実践している	合計	過去に体験したことがある	現在も実践している	合計	過去に体験したことがある	現在も実践している	合計	過去に体験したことがある	現在も実践している	合計
むかわ	4.8%	0.8%	602	1.5%	0.8%	595	9.5%	6.6%	602	2.8%	1.3%	597	6.0%	1.3%	597
札幌	12.8%	0.9%	436	6.8%	0.7%	424	19.8%	11.0%	444	10.3%	1.9%	426	12.4%	3.3%	427
新ひだか	16.4%	4.2%	311	6.9%	3.0%	305	6.6%	3.9%	304	10.0%	2.7%	299	13.6%	6.6%	302
伊達	7.3%	0.7%	150	1.3%	1.3%	149	8.1%	2.0%	149	4.8%	0.7%	147	4.7%	2.7%	148
白糠	1.4%	0.0%	71	2.8%	0.0%	71	8.5%	5.6%	71	1.4%	0.0%	70	2.9%	1.4%	69
合計	9.4%	1.5%	1570	4.1%	1.2%	1544	11.7%	6.9%	1570	6.4%	1.6%	1539	9.0%	3.0%	1543

	カ. 伝統的な先祖供養			キ. イナウを捧げる			ク. 神々への祈り			ケ. 神聖な場所への祈り			コ. 海・川・山でのタプーや約束事		
	過去に体験したことがある	現在も実践している	合計	過去に体験したことがある	現在も実践している	合計	過去に体験したことがある	現在も実践している	合計	過去に体験したことがある	現在も実践している	合計	過去に体験したことがある	現在も実践している	合計
むかわ	13.7%	8.9%	604	12.5%	7.6%	602	7.5%	8.8%	600	3.3%	3.5%	598	1.8%	2.8%	601
札幌	20.7%	10.7%	439	18.3%	9.8%	438	18.7%	11.2%	439	12.3%	8.4%	430	5.8%	6.5%	429
新ひだか	16.5%	15.2%	310	14.4%	12.7%	306	10.7%	8.5%	307	6.9%	7.8%	306	3.6%	3.6%	302
伊達	10.2%	6.8%	147	7.5%	6.2%	146	10.7%	6.7%	150	6.7%	2.7%	149	3.4%	2.7%	147
白糠	27.0%	29.7%	74	25.4%	23.9%	71	29.2%	26.4%	72	20.0%	20.0%	70	11.3%	8.5%	71
合計	16.5%	11.4%	1574	14.6%	9.9%	1563	12.6%	10.0%	1568	7.6%	6.4%	1553	3.9%	4.3%	1550

	サ. 器物送り(モノ等を捨てるときに)			シ. 扎ない(天候改善、自然災害を避ける、体調不良や病気を治す)			ス. 占いや霊をおろす人にみてもらう(トウス)			セ. 夢見を大事にする		
	過去に体験したことがある	現在も実践している	合計	過去に体験したことがある	現在も実践している	合計	過去に体験したことがある	現在も実践している	合計	過去に体験したことがある	現在も実践している	合計
むかわ	1.8%	0.7%	598	1.7%	1.3%	599	5.8%	1.3%	600	2.5%	5.7%	595
札幌	6.6%	2.3%	426	5.0%	1.7%	422	4.1%	1.0%	416	4.4%	10.3%	427
新ひだか	5.6%	4.0%	301	3.7%	0.3%	300	5.6%	0.3%	302	4.3%	5.0%	300
伊達	2.1%	2.1%	146	2.8%	0.7%	144	2.2%	0.7%	139	2.7%	5.4%	147
白糠	2.9%	1.4%	70	5.6%	1.4%	71	2.8%	1.4%	71	5.6%	2.8%	71
合計	4.0%	1.9%	1541	3.3%	1.2%	1536	4.8%	1.0%	1528	3.6%	6.7%	1540

表4-4 伝承活動・復興活動

	ア. アイヌ語			イ. 口承文芸 (ユカフ、ウエベケ等)			ウ. 歌 (ウポボ、座り唄等)			エ. 楽器 (ムツクリ、トンコリ等)			オ. 踊り		
	かつて 関わった ことがある	現在関 わっている	合計	かつて 関わった ことがある	現在関 わっている	合計	かつて 関わった ことがある	現在関 わっている	合計	かつて 関わった ことがある	現在関 わっている	合計	かつて 関わった ことがある	現在関 わっている	合計
むかわ	13.9%	4.9%	596	7.1%	2.5%	594	7.7%	5.0%	595	6.9%	3.0%	593	11.6%	5.7%	594
札幌	18.5%	9.2%	448	13.8%	6.3%	441	17.3%	9.9%	445	19.2%	11.6%	448	19.6%	10.0%	448
新ひだか	17.2%	4.6%	302	7.4%	2.0%	299	13.1%	5.9%	305	10.3%	4.3%	300	16.8%	8.1%	310
伊達	5.3%	1.3%	150	4.0%	0.7%	149	6.0%	1.3%	150	9.4%	0.7%	149	14.8%	2.0%	149
白糠	12.3%	11.0%	73	2.9%	7.2%	69	9.9%	18.3%	71	2.9%	14.5%	69	8.6%	20.0%	70
合計	15.0%	6.0%	1569	8.6%	3.5%	1552	11.4%	6.8%	1566	11.2%	6.0%	1559	15.1%	7.7%	1571

	カ. 祭事 (カムイノミ等)			キ. 編み物			ク. 刺繍			ケ. 織物			コ. 伝統的狩猟・ 農法・漁法		
	かつて 関わった ことがある	現在関 わっている	合計	かつて 関わった ことがある	現在関 わっている	合計	かつて 関わった ことがある	現在関 わっている	合計	かつて 関わった ことがある	現在関 わっている	合計	かつて 関わった ことがある	現在関 わっている	合計
むかわ	19.4%	8.7%	598	8.3%	2.7%	592	14.1%	3.9%	596	4.4%	1.9%	592	5.7%	2.5%	593
札幌	24.8%	12.2%	451	13.5%	6.1%	445	17.7%	10.6%	451	12.4%	5.0%	442	9.9%	3.9%	435
新ひだか	17.8%	13.1%	314	5.3%	3.0%	301	10.2%	5.6%	303	5.2%	2.9%	306	5.9%	2.3%	303
伊達	20.3%	9.2%	153	3.3%	2.0%	150	8.0%	1.3%	150	4.1%	1.4%	148	1.4%	0.0%	145
白糠	23.6%	30.6%	72	18.6%	2.9%	70	23.6%	12.5%	72	13.0%	5.8%	69	2.9%	4.4%	68
合計	20.9%	11.6%	1588	9.2%	3.7%	1558	14.2%	6.3%	1572	7.2%	3.1%	1557	6.4%	2.7%	1544

	サ. 調理・保存法			シ. 木彫			ス. 自然観察会 (エコツアー等)		
	かつて 関わった ことがある	現在関 わっている	合計	かつて 関わった ことがある	現在関 わっている	合計	かつて 関わった ことがある	現在関 わっている	合計
むかわ	9.5%	4.7%	591	7.9%	1.7%	593	3.2%	1.3%	595
札幌	18.4%	6.7%	446	16.1%	6.1%	446	8.4%	5.0%	441
新ひだか	15.6%	6.5%	307	4.0%	2.0%	303	2.0%	0.7%	302
伊達	8.1%	3.4%	148	6.8%	7.4%	148	4.1%	0.0%	147
白糠	9.7%	11.1%	72	10.1%	4.3%	69	4.3%	2.9%	70
合計	13.1%	5.8%	1564	9.5%	3.7%	1559	4.6%	2.2%	1555

第2節 過去のアイヌ文化の実践内容

第1項 むかわ町

(1) 「エスニシティ潜在期（1945～1960年代後半）」

むかわ町で子どもの頃に生活していた「老年層」や「壮年層」のうち50歳代のインタビュー協力者の生活史を見ると、アイヌの「伝統文化」が一定程度見られたと判断できる。たとえば、自身の家庭や周囲に囲炉裏、シントコ（行器）などの儀礼具などがあったと述べる者が見られるからである。具体的には、

【むかわ町、老年層】

「家は桎葺き（薄い板を重ねたもの）の小さな家だった。炉はあった。シントコ（樽型の容器・桶）とかエムシ（刀）とかトゥキ（盃）とかはあった。儀式に使うのでそんなになかったが、1軒に2組や3組はあった。」

【むかわ町、老年層】

「（インタビュー協力者の）家は幼少の頃からずっとチセ（注：茅葺きか桎葺きかは不明）だった。また、周囲では和人や少し力のあるアイヌの人たちがストーブを使っていたが、（インタビュー協力者の）家では小学4年生くらいまで焚き火をしていた。チセでの暮らしは1957（昭和32）年頃まで続いた。」

という言及が見られる。

こうしたアイヌ文化のいわば「ハード」的な側面だけでなく、入れ墨、カムイノミなどの宗教儀礼、歌や踊り・口承文芸などのいわば「ソフト」的な側面も、「老年層」のインタビュー協力者から見て祖父母の世代を中心に行われていたようだ。たとえば、代表的な例を見ると、

【むかわ町、老年層】

「祖母は入れ墨をしていて、アイヌ語も話せた。年寄り同士が集まった時に、昔話（ウエペケレ）をアイヌ語でやっていたが、（インタビュー協力者には）あまり通じなかった。先祖供養（イチャルパ）もやっていた。子どもの頃は、なにかあるたびに、部落の身内や親戚の人が集まって専門の人を頼んでカムイノミとかをやったり、みんなで踊ったり（ホリッパ）した。子どもたちは、神様に捧げた残りをもらえるから、結構そういう行事の場所に出ていた。」

という言及が見られる。また、そうした「伝統文化」、とくに宗教儀礼は日常生活に深く根付いていたという性格を持っていたようだ。そして、それは「壮年層」の生活史から得られるという点で、1950年代後半～1960年代前半という「エスニシティ潜在期」の後半にもそうした文化が残っていた可能性を示唆している。

【むかわ町、壮年層】

「イナウは家にあった。日常的にあったということではないが、当時特別なこととして見ていた

わけではない。特別なこととして見るのは今だからだと思う。神様にお祈りするというのが年に1回とか2回とかしかなくても特別なことではなかった。」

【むかわ町、壮年層】

「イナウを捧げることや、カムイノミは、家庭内でよく目にする光景だった。」

ただ、アイヌ語に関しては、こうしたカムイノミや歌や踊りを行う際や、「老年層」の両親や祖父母世代を中心としてわかる者同士で話す際など限られた場面でのみ用いられ、日常的には用いられているとはいいがたかったようだ。

【むかわ町、老年層】

「父親のやっているお店に買い物に来たおばあさんと、母親がアイヌ語でちょちょことしゃべっていたのは記憶している。ぼろぼろとアイヌ語は出てくるが、意味はわからなかった。そういうお客さんが来ると両親はアイヌ語でしゃべっていたが、普段の生活の中ではアイヌ語は話さず日本語を使っていた。」

こうした点は、当時のアイヌ語話者が、アイヌ語を次の世代に残さないよう努めていた点と関連しているかもしれない。

【むかわ町、老年層】

「祖母の世代でも、日常でアイヌ語は使っていなかった。ただ、いくつかの単語は会話で聞くことがあった。一時期、祖母にアイヌ語を教えてほしいと頼んでいたものの、「これからの時代はアイヌ語なんて必要ない」と、ついに教えてもらうことはかなわなかった。」

また、こうした「意図的」に文化を伝達しないよう努める点は、宗教儀礼や口承文芸の場合にも見られたようだ。

【むかわ町、老年層】

「当時孫じいさんは長老だったので、隣近所で不幸などがあると、呼ばれて行って、神主や坊さんの代わりをしていた。そして、日常的にアイヌの神々へのお祈りなどはしていた。ただ、「こういうことは続かない」と言って、祭壇や刀、シントコを売ってしまった。家では、盆や正月になると、孫じいさんも一緒にお酒を交わして、イナウ（木を削った神聖な棒）を作った。（インタビュー協力者は）見てはいたが、下げ方はわからないかもしれない。孫じいさんとは子どもの頃から一緒に暮らしていたが、実際にその頃はもう「恥ずかしいから」と教えてくれなかった。」

【むかわ町、老年層】

「小学校高学年から中学生のころ、秋になり、夜になると仕事がないから、ご飯を食べたら、おばあちゃんが来て、母親といつもウェペケレ（口承文芸）していた。（インタビュー協力者が）中

学生で勉強しているときも2人で物語を話して涙を流したりしている。おばあちゃんに、「その言葉を教えて」と言ったら、「おまえはそういうことを覚えなくても、勉強していればいいんだから」と言われ教えてもらえなかった。」

このように見れば、「エスニシティ潜在期」（1945～1960年代後半）では、「老年層」や「壮年層」のうち50歳代よりも上の世代、とくに祖父母世代には、アイヌの「伝統文化」が実践されていたものの、該当するインタビュー協力者自身は、多くの場合、そうした文化をはたから見聞き経験していたものの、実際にそれを実践していたとはいえなかったのだろう。そこには、「老年層」から見て上の世代による「意図的」な文化の「切断」があったのかもしれない。とはいえ、その当時は、特定の世代によって主に担われていたという形ではあるものの、アイヌの「伝統文化」は実践され、生活に根付いていたといえよう。

（2）「民族復権運動高揚期」（1960年代後半～1992年）

では、次に、「壮年層」や「青年層」のうち30歳代の子どもの頃の生活史を見てみよう。そこからは、先に確認したアイヌの「伝統文化」に関する言及はほとんど見られなくなる。たとえば、チセや囲炉裏が家庭や周囲にあったと言及するものは見られず、漆器などがあったと述べる者も1名しかいない。また、「家ではアイヌのしきたりはなかった。隣の爺さんがイチャルパをやるのを1、2回ぐらい見たことがある。」と述べる者も1名、「神おろしをする親戚のおばあさんがいた。霊が降臨するみたいな感じで探し物だとか、悩み事などを見ていた」と述べる者も1名しか見られない。その意味で、アイヌの「伝統文化」が、自身の家庭や周囲において見られなくなっている。

ただ、入れ墨をした女性を見たことがあると述べる者は、「壮年層」のうちとくに50歳代の者において、それなりに見られる。たとえば、以下のように述べる者がいる。

【むかわ町、壮年層】

「とくにアイヌに関する思い出はないが、口のまわりに入れ墨をしている女性がいて、初めて見た時にはとても驚いた。」

とはいえ、この点は、入れ墨というアイヌの「伝統文化」のみが引き続き継続していることを意味してはいるとはいいいがたい。なぜなら、入れ墨は身体から「消す」ことは難しいからである。このように見れば、先に見た「エスニシティ潜在期」ほどには「老年層」の祖父母世代が中心となって実践していたアイヌ文化は見られなくなっているよう。

ただ、アイヌ語に関しては、部分的に「継承」されていた側面があったようだ。具体的には、単語のレベルで冗談や悪口を言い合うような形でそれはなされていた。そして、それは「壮年層」自身も行っていた例が見られる。その意味で、アイヌ語は、日常で使用する用語ではない形で事実上の「継承」がなされていたと解釈できよう。

【むかわ町、壮年層】

「親はアイヌ語をたまに使っていた。よくわからないけれど、冗談っぽくいう言葉がいろいろあり、

言葉を知っている者同士なら冗談で言いあう会話のようなもので、まじめに聞いたらひどく怒るような会話をしていた。」

【むかわ町、壮年層】

「日常的に「なにこのイポカシ（可愛くない）」とか「ハイタ？（ばかじゃないの）」などアイヌ語でおばあちゃんがよそのおばあちゃんに言ったりしていた。（インタビュー協力者たちは）訳がわからず「ふーん」という感じで聞いていた。」

【むかわ町、壮年層】

「（インタビュー協力者）自身は子どもの頃からアイヌだと言われていたし、アイヌ語の単語を使ったりしていた。」

ただし、より注目すべきは、この時期には新たな動向が見られる点である。たとえば、

【むかわ町、壮年層】

「1970年代後半に母親と鵒川に戻ってきた。母親と鵒川にもどってきってから、母親はアイヌ文化にかかわることを色々やり始めた。近くに親戚やおばあちゃんがいたので母親は教えてもらっていたと思う。鵒川に帰ってきからは着物を一生懸命作っていたし、刺繍もしていた。母親が掛け声を出してよく踊りを踊っていたのも何となく覚えている。」

というように、「壮年層」から見て祖父母世代からアイヌ文化の「学習」を行うような親世代の存在が言及されている。また、以下のように述べる「青年層」もいる点から、着物、刺繍、歌と踊りなどのアイヌ文化を実践する者が、一定程度存在していたことが推測されよう。

【むかわ町、青年層】

「小学生の頃、祖母に踊りに連れていかれた。同居していた祖母には、アイヌの祭事にたびたび連れて行かれたので年配の人がアイヌの行事（踊りなど）をやっているのを見たことがある。祖母は、着物や頭の飾りを持っていた。」

他方で、宗教儀礼に関しては以下のような記述が見られる。

【むかわ町、青年層】

「イナウを捧げたり、祭壇にイナウを並べたりするのは、小さい頃から行っていた鵒川のカムイノミの事業で見たことがある。」

ここで注意を払いたいのは「カムイノミの事業」と述べている点である。この点からは、先に確認した「エスニシティ潜在期」において「老年層」より上の世代が体現していたような日常生活に深く根付いたカムイノミではなく、現在、むかわアイヌ協会や鵒川アイヌ文化伝承保存会（1980（昭

和 55) 年～) が中心となり行われているいわば、「再興」されたカムイノミを経験していると判断することが妥当だろう。

いずれにせよ、この「民族復興運動高揚期」(1960 年代後半～ 1992 年)では、一方で「エスニシティ潜在期」で見られたアイヌの「伝統文化」が見られなくなりつつ、他方でアイヌ文化の「学習」や「再興」がなされはじめてきたといえるのではないだろうか。

第 2 項 札幌市

(1) 「エスニシティ潜在期 (1945 ～ 1960 年代前半)」

次に、札幌市の場合を見ていこう。ただ、札幌市の「老年層」や「壮年層」のうち 50 歳代のインタビュー協力者の生活史を見ると、「エスニシティ潜在期」に札幌市で生活をしていたものはほとんど見られない。それは、そもそも札幌市にはアイヌの人々が多くなかった事実が関係しているかもしれない (小内編著 2012 : 9-11)。

ただし、生まれてすぐ札幌に転居したインタビュー協力者や、1950 年代前半に札幌市にきたインタビュー協力者もいる。そこで、そうした者の生活史から当時のアイヌ文化の実践内容を推測してみよう。たとえば、以下のような言及が見られる。

【札幌市、老年層】

「父は熊彫り、母は父が彫った彫りものを売って歩いていたが、生活のためにすぐに札幌に出てきた。(アイヌの「伝統文化」は見たことがないが)ただ、父が「火の神様」、「水の神様」などを大事にしていたのは覚えている。今 (インタビュー協力者が) 色々と携わってきて、伝統的なことをやっていたということがわかった。」

先にふれたように、札幌市にはそもそもアイヌの人々がそれほど多くは見られなかった。また、札幌市は北海道の中でも、「開発」が早く進んでいたと思われる。それゆえ、むかわ町では言及が見られた罌罌裏などのアイヌの「伝統文化」は見られなかったのではないだろうか。また、多くの者が札幌市に転居してきた点をふまえると、シントコなどの儀礼具も転居の際に持っては来なかったためにそれらも身近にはあまり見られなかったと思われる。また、むかわ町で見られた宗教儀礼や踊りや歌なども、それを中心的に担っていたと推測できる「老年層」から見て祖父母世代が札幌市に一緒に転居するということはなされなかっただろう。その意味で、アイヌの「伝統文化」を行う物理的人的な「リソース」が少なかったのではないか。ただし、先の言及に見られるような「火の神様、水の神様」を大事にする等の精神文化は、先にふれた「リソース」が少なくとも実践することができたために、札幌市においても見られたと思われる。

また、先の言及で注目すべきは、「父が熊彫り」すなわち、木彫りを生計手段としていたという点であろう。この点については、以下のように言及するインタビュー協力者もいる。

【札幌市、老年層】

「1950 年代中頃に結婚した。結婚と同時に理容見習いをやめた。夫は熊の木彫りの仕事をしていて、(インタビュー協力者は) 熊の色を塗ったり、ロウも磨いたりして、夫の手伝いをした。夫の

お父さんは、別居して住み込みのかたちで木彫りをしていたが、夫が16歳か18歳の時に亡くなった。兄弟もたくさんいて家族の面倒をみなければならないので、熊を掘るための見習いなどをして、自分で木彫りの技術を身につけたようだ。」

ここからも、札幌市において木彫りを生計手段とするアイヌの人々がいたことが示唆されよう。このように見れば、「エスニシティ潜在期」は札幌市において、精神文化の重視と木彫りという生計手段という特質を持っていたといえるのかもしれない。

（2）「民族復権運動高揚期」（1960年代後半～1992年）

では、次に、「民族復権運動高揚期」では、どのような文化実践が見られたのだろうか。そこで、「壮年層」や「青年層」のうち30歳代の生活史を見てみよう。ただ、この時期においても子どもの頃札幌市で生活していた者は少ない。そこで、「老年層」の当時の生活史にもふれつつ、当時のアイヌ文化の実践を推測してみよう。まず、札幌市で生まれ育った「壮年層」からは以下のような言及が見られる。

【札幌市、壮年層】

「（インタビュー協力者の）父親は、表立って「アイヌ工芸店」という看板は出していないものの、頼まれればクマの木彫りをしていた。」

このことは先にふれた「エスニシティ潜在期」においてふれた木彫りがこの時期においても存在していた可能性を示そう。ただし、「表立って」「看板を出していない」という点からは生計手段としての意味は持ちにくくなっていた可能性もある。また、ある「老年層」の者は1970年代前半の状況を以下のように述べている。

【札幌市、老年層】

「1970年代前半の頃、熊を掘っているアイヌのおばあちゃんの日々の生活が苦しいことや、母子世帯が多いこともわかってきた。みんな個人経営だったから、仕事がなくなると危ないと思った。」

他方で、「老年層」の生活史を見ると、この時期に設立・設置された札幌アイヌ協会などの団体や施設を母体として、様々な文化実践がなされ始めたと推測できる。具体的に確認すると、1971（昭和46）年に北海道ウタリ協会石狩支部が設立され、翌年の1972（昭和47）年に同支部が札幌支部になり（小内編著 2012：10）、1978（昭和53）年には白石区に生活館（2004（平成16）年からは共同利用館に）が建設されている（札幌市 2010：16）。この点を念頭に置きながら、以下の言及を見よう。

【札幌市、老年層】

「札幌へ来て、ウタリ協会（現：札幌アイヌ協会）に誘われて入会した後、友だちがアイヌ語を話していたので、少しだけ覚えた。40歳過ぎから刺繍を始め、仕事をしながら空いた時間を使っ

て作業をした。」

このインタビュー協力者は70歳代であり、おおよそ1970年代後半から1980年代中頃には刺繍を始めていることになる。また、

【札幌市、老年層】

「1980年代中頃からアイヌ協会の織布の仕事を始めた。アイヌ協会には織布を始める3年から4年くらい前に入会していた。1月から3月まで機動訓練を受けて、その後6ヶ月間は習いながら仕事を覚えて1年おきにその織布の仕事をした。」

と述べる者もいる。

北海道ウタリ協会札幌支部（現：札幌アイヌ協会）の主な活動を見ると、1979（昭和54）年から「アイヌ語教室ウエカルパ」が発足し、1980（昭和55年）に「子ども日曜学習会」（2008年時点では「アイヌ子弟の学習会ボンイセポ」という名称で毎週土曜日に開催）が始まり、1991（平成3）年からは札幌ウポポ保存会の事業が開始されている（札幌市教育委員会 2008：115）。

この点に関して、「子ども日曜学習会」への参加経験を意味していると解釈できる言及を行う者がいた。

【札幌市、壮年層】

「白石の生活館の集まりでアイヌ語の勉強会や儀式に参加した。」

このように見れば、「民族復権運動高揚期」においては、一方で木彫りは生活の中での意味を変容させている可能性を持ちつつ、他方で札幌アイヌ協会の存在を背景としながら、アイヌ文化の「学習」や「再興」が進んでいた時期と解釈できるかもしれない。

第3項 新ひだか町

（1）「エスニシティ潜在期（1945～1960年代後半）」

新ひだか町で子どもの頃を過ごした「老年層」の生活史を見ると、第1項でふれたむかわ町と同様、アイヌの「伝統文化」が、「老年層」の祖父母世代を中心に一定程度見られていたと判断できる。代表的な言及を見てみよう。

【新ひだか町、老年層】

「子どもの頃、熊送りを体験した。祖母が熊にご飯をやって、家で育てて、大人たちが集まって何かやっていた。家にあった松の木の下には熊の髑髏（頭）をずらっと並べて飾ってあった。祖母は入れ墨をしており、耳は丸く開いていた。クマ猟はしたことはないが、シャケ猟はやっていた。供養が終わった後は、囲炉裏を中心として、男も女もみんなで踊っていた。伝統的な家具もあった。宝物では刀があった。毛皮もあった。ヌササン（祭壇）は熊の頭のところにあった。アイヌにトゥスクル（巫術師）はいっぱいいいたが、見てもらったことはなかった。」

ここからは、クマ送り、ヌササンがあったことからイナウを捧げること、さらに先祖供養などの宗教儀礼的な文化がなされていたと判断できる。また、入れ墨をした女性の存在や、踊りなどもなされていたことがわかる。なお、クマ猟に関しては、「若い時からの楽しみ。クマを獲るのが楽しかった。父や弟も熊猟をしていた。1985 年頃にやめた」と述べる「老年層」もあり、その意味でこの時期において一定程度見られていたと判断できる。

こうした「老年層」の生活史から得られる言及は、「壮年層」からも述べられている。

【新ひだか町、壮年層】

「曾祖父の家は藁葺の家ではなかったが板チセだった。そこには昔から囲炉裏もあったし、刀や珠など全部あった。曾祖父がアイヌ語を話しているのを聞いていた。カムイノミやイタコ（おそらくトウスクル）みたいなこともしていた。神様にお願いすることをカムイノミというから、動物を獲った時でも、食物を収穫した時でも、これから何かを始めるという時でも、1 年間に何回も、その時期に応じてやっていた。」

ただ、やはり新ひだか町でも、こうした文化の実践は、「老年層」から見て祖父母世代が中心となつてなされており、また、次世代への文化の「伝達」を「意図的」に避けていたようだ。たとえば、以下のような言及が見られる。

【新ひだか町、老年層】

「子どもの頃、祖母がアイヌ語で「1, 2, 3, 4」と言うと、母が「そんな子どもに言ったら、子どもが学校に行くようになったら、バカにされるから、教えるな」と言ったので、「教えて」と言っても祖母はしゃべらなくなった。年寄り同士が集まると、アイヌの言葉でしゃべっているから、何を言っているのかわからなかった。年寄りはアイヌ語を日常会話としてよく話をしてはいたけれど、（インタビュー協力者には）全然わからなかった。」

【新ひだか町、老年層】

「イナウは家の中にあり、最初は飾りだと思って見ていた。父親が出稼ぎから帰って来ると、イナウを家の中の魂のように扱い、ストーブの火に向かって何かやっていた。1960 年くらいまでだったと思う。その頃、父親が自分の代で終わりだということを口にしていた記憶がある。だから「お前たちはしなくていいぞ」というようなことを言っていた。結局時代が変わり、そういう行事そのものを家の中でやることができなくなっているという気持ちだったのかもしれない。」

以上のように見てくると、新ひだか町では「エスニシティ潜在期」（1945～1960 年代）において、むかわ町とほぼ同様に、「老年層」よりも上の世代とくに祖父母世代には、アイヌの「伝統文化」が実践されていたものの、該当するインタビュー協力者自身の多くは、そうした文化を間接的に聞きしていたという状況であったのではないか。

ただ、新ひだか町には、シャクシャイン法要祭が 1947（昭和 22）年と「エスニシティ潜在期（1945～1960 年代後半）」の前半に開始されている点には注目しておく必要がある。実際、こうしたシャ

クシャイン法要祭に行った経験がある祖母を持つ者もいる。

【新ひだか町、壮年層】

「祖母はアイヌ語を日常会話として使用しており、踊りもしていた。シャクシャイン祭りに行っていた」

このような組織的な文化実践が、戦後直後からなされていたという点は、新ひだか町の相対的な特徴といえるのかもしれない。

(2) 「民族復権運動高揚期」(1960年代後半～1992年)

次に「壮年層」の子どもの頃や、「老年層」の20～40代頃の生活史をもとに「民族復権運動高揚期」の文化実践の特質について検討してみよう。そこからは、「エスニシティ潜在期」で見られたほどではないものの、先に確認したようなアイヌの「伝統文化」に関する言及を行う者が見られる。たとえば、

【新ひだか町、壮年層】

「(インタビュー協力者の)曾祖母は口を黒く染めていた。小さい時、曾祖母が来ると顔を見てよく泣いていた。父親はずっと木彫りをして収入を得ていた。母は専業主婦で父の仕事を手伝っていた。趣味になるが、猟師もしており、クマ猟をして鹿も獲っていた。イナウも作っていた。動物送りの儀式もしていた。トゥスクルは見たことがある。」

【新ひだか町、壮年層】

「子どもの頃、おばあちゃんの世代の人たちが来ると、アイヌ語を話しているのを聞くことがあった。両親はアイヌ語を話さなかった。おばあちゃんは入れ墨をしていたし、儀式的時にはニンカリをしていた。父はクマ猟をしていた。祀りものを用意していたのは知っている。イチャルパをしていたのかもしれないがよくわからない。イナウについては、叔父さんの家に置いてあった記憶はある。イナウで何かやっているぐらいで、実際に捧げているという感じでは見ていなかった。ウボボ(歌)をずっと歌っていたおばさんが近所に住んでいて、その人が料理を持ってきてくれたりしていた。」

という言及が見られる。

また、葬儀に関しては以下のような言及が見られることから、「民族復権運動高揚期」において親族や本人の希望がある場合、アイヌの様式で葬儀がなされる場合もあったようだ。

【新ひだか町、老年層】

「兄は1970年代頃に亡くなった。父親はお寺が嫌いだったから、父親がアイヌの言葉で祝詞をあげてお葬式を出し、火葬にした。」

【新ひだか町、老年層】

「母は口に入れ墨をしていて、死んだ時には土葬にしてほしいという希望が強かった。母は1980年代半ばに亡くなり、土葬で葬儀を行った。」

さらに、先に「エスニシティ潜在期」においてふれたシャクシャイン法要祭に行った経験があると述べる者もいる。

【新ひだか町、壮年層】

「家の中ではアイヌの文化に触れたことはない。ただ、真歌公園でシャクシャイン法要祭が開かれるので、そこには結構小さい頃から行っていた。踊りを見たりとか、アイヌ資料館があるのでそこ見たりですね」

【新ひだか町、壮年層】

「シャクシャイン法要祭で踊りを見たことがあった。小さい頃は行事があれば母親に連れられて行った」

こうしたシャクシャイン法要祭は、その運営などに主体的に参加する者がいなければ行われない。その意味で、そうした祭りに参加する者の存在はもちろん、上記の言及のように「見学」という形でアイヌ文化に触れる者が存在していたことを示唆しよう。

また、シャクシャイン法要祭の「踊り」に関しては、以下のような言及が見られる。

【新ひだか町、老年層】

「1970年代中頃にウタリ協会（現：新ひだかアイヌ協会）に入って、その年の9月にシャクシャイン法要祭を手伝いに行き、踊りを見てすばらしいと思い保存会に入った」

【新ひだか町、壮年層】

「保存会に入り、踊りに参加するようになった。踊りは1980年代に2年くらい続けた。」

【新ひだか町、青年層】

「（インタビュー協力者は）母親が保存会に入っていて、一緒に連れられて保存会に入った。小学校1年生頃1980年代前半から保存会に入っていた」

ここでいう「保存会」は、おそらく、1961（昭和36）年に設立された静内無形文化保存会を改称し、1973（昭和48）年に体制確立が図られた静内民族文化保存会であると思われる（アイヌ文化振興・研究推進機構ホームページ参照）。

このように見れば、こうした静内民族文化保存会の活動が事実上活性化し始めてきたという点が、この時期の新ひだか町における文化実践の特質といえるのかもしれない。

第4項 伊達市

(1)「エスニシティ潜在期(1945～1960年代後半)」

さらに、伊達市の場合を見てみよう。子どもの頃に伊達市で育った「老年層」の生活史を見ると、たとえば、カムイノミやイナウなどの宗教儀礼的な実践、また歌や踊りなどの実践が、自身が子どもの頃に家庭や周囲で行われていたと述べる者が見られず、その意味でむかわ町や新ひだか町で見られたようなアイヌの「伝統文化」がほぼ見られない。

ただし、アイヌ語を話す者や入れ墨をした女性の存在、さらに漆塗りのお椀などに言及する者が見られる。いくつかの言及を見てみよう。

【伊達市、老年層】

「アイヌ語というか、教えられたわけではないけれど、ばあちゃんがしゃべっていたことで覚えていました。ばあちゃんは、口の周りに入れ墨があったような気がします。刀とか漆塗りのお椀とかは家にありましたね。」

【伊達市、老年層】

「子どもの頃、アイヌ語を片言で日常会話に使っていた。入れ墨や耳輪は見たことがある。」

【伊達市、老年層】

「(インタビュー協力者の) 家にあったのは、宝物ぐらいだった。両親はどこかのおばあちゃんと話す時にアイヌ語を使っていたが、家の中ではアイヌ語を使っていなかったので、(インタビュー協力者は) わからない。小さい頃に入れ墨や耳輪をしている人は見たことがある。親たちはアイヌ語を話せたが、(インタビュー協力者は) 話せない。」

とはいえ、「壮年層」のうち50歳代の生活史を見ると、漆塗りのお椀などに言及する者は見られず、さらにアイヌ語を話す者がいたと述べる者は1名しかいない。さらに、入れ墨に関しては、以下のように記憶が「曖昧」になっている者がいる。

【伊達市、壮年層】

「子どもの頃はよくわからないんですけど、口に入れ墨をしていた人がいましたよね。近所に住んでた気がするんですよね。話に聞いて覚えてるのか、自分で見て覚えてるのかちょっとわからないんですけど。」

(2)「民族復権運動高揚期(1960年代後半～1992年)」

こうした「エスニシティ潜在期」の状況を反映し、「民族復権運動高揚期」においてもアイヌ文化に関する言及がほとんど見られない。ただし、子どもの頃に伊達市で育った「壮年層」のうち40歳代の者の中には、アイヌ語を話す者や入れ墨をした女性の存在、酒を注ぐ儀礼具に関する言及を行う者がいる。

【伊達市、壮年層】

「おばあちゃんが、一緒には住んでいなかったのですが、ときどきアイヌ語を普通にしゃべっていたような記憶があります。時々なんですけど、ちょっとした短い単語みたいな。」

【伊達市、壮年層】

「おばあさんが口元に入れ墨をしていた記憶はある。父親が昔知り合いから「アイヌの宝物」だといってお酒を注ぐ道具のようなものをもらったことがあるとは聞いた。いまだに家の屋根裏に入ってるかな。」

このように見ると、伊達市においては、「エスニシティ潜在期」と「民族復権運動高揚期」に共通して、アイヌ語を話す者や入れ墨をする者の存在、儀礼具の所有という形でアイヌ文化が見られたといえよう。

とはいえ、伊達市は、むかわ町や新ひだか町と比べて、「エスニシティ潜在期」においても「民族復権運動高揚期」においても、アイヌの「伝統文化」があまり見られない。その意味で、伊達市は同化が早く進んだ地域であると解釈できるのかもしれない。

第5項 白糠町

(1) 「エスニシティ潜在期 (1945 ～ 1960 年代後半)」

白糠町で子どもの頃生活をしていた「老年層」の生活史を見ると、むかわ町、新ひだか町で見られたようなアイヌの「伝統文化」に言及する者がいくつか見られ、その意味でそうした文化が一定程度見られたことがわかる。

【白糠町、老年層】

「祖母は日常的にアイヌ語を使っており、泊まりに行くと祖母は祖母の友人とアイヌ語で話していたのを見たが、祖母はそれを覚えない方がいいと言って、あまり聞かせないようにしていた。幼い頃に触れたアイヌ文化として、近所のおじさんによるカムイノミ、入れ墨をしている近所のおばあさん、マレク（突き鉤）を使ったサケ漁、おばあさんのキナ（草）の編み物などがあり、おばあさんから話を聞くことも多かった。家に囲炉裏があり、何かあれば近所のおじさんがカムイノミをしに来た。しかし、親はそのようなことはしなかった。」

【白糠町、老年層】

「アイヌ語は教えてもらっていないが、祖父母がアイヌ語で「ホッケブクロ（寝なさい）」や「イコタイコタ（早くしなさい）」「ダッカーシー（戸を閉めなさい）」など単語で話をされ、なんとなく理解していた。また、お茶会をしているときはアイヌ語を話していた。祖母はニンカリ（耳輪）を持っていた。トゥキなどもあった。囲炉裏は日常的にあったがいつの間になくなっていった。イチャルパを行うためにイナウや、ペネプ（アイヌの守り神）の慣習もあった。トゥスクルもいた。アイヌとシャモのお墓がわかれていた。そこで、毎年6月4日にイチャルパがある。イチャルパが終わったら踊ったことが印象深い。ヌササンが家の近くにあったが、神聖な場所なのでいたずらさ

せないために、近寄ったら幽霊がでると言われていたので絶対に行かなかった。」

こうした言及は、「壮年層」においても見られる。たとえば、

【白糠町、壮年層】

「子どもの頃に祖母が近所の人たちとアイヌ語で話しているのを聞いた。祖母は、入れ墨をしたおばあさんと神おろし（トウスクル）をするおばあさんと仲が良く、よく3人でアイヌ語で話していた。家には囲炉裏があり、そこをまたごとすると火の神様がいるのでまたいではいけないと祖母によく怒られた。家にトウキやパスイ（箸、神様に酒を捧げるためのへら状の器具）があり、小さい頃は何かわからなかったが、物心ついた頃から、祖母が使っているのを見たりしていくうちにだんだんとそれらが何かわかるようになった。家の神棚の中に、イナウが入っていて、そこにお供えなどをしており、自分の家のアイヌの守り神を大切にしていた。」

このように見れば、むかわ町や新ひだか町と類似した形で、白糠町においても、「エスニシテイ潜在期」においてアイヌの「伝統文化」が一定程度見られたと解釈できるのではないだろうか。

（2）「民族復権運動高揚期」（1960年代後半～1992年）

次に、子どもの頃白糠町で育っている「壮年期」のうち40歳代の者及び「青年層」の生活史を見てみよう。たとえば、以下のような言及が見られる。

【白糠町、壮年層】

「小さい頃からいくつかのアイヌ文化に触れていた。アイヌ語を話す祖母がいたため、日常的に聞く機会があり、アイヌ語を自然に覚え、文章では話せないが、「ワッカ（水）」など簡単なアイヌ語の単語を使うこともあった。サケ漁は見たことがある。囲炉裏は実家にはあったが使ってはいなかった。イナウは祖母が生きていた頃にはあった。周りには、なにか行事があるときにイナウを作る人がいた。」

ここからは、「民族復権運動高揚期」においても先にふれたアイヌの「伝統文化」が一定程度見られたと判断できよう。

ただ、この時期には新たな文化実践の動きも見られる。たとえば、以下のように述べる者がいる。

【白糠町、壮年層】

「周りのアイヌの方々とは、保存会で踊りの練習をしたり、白糠の行事のときに集まったりしていた。上の世代から何かを特別に継承したということはなかった。ただ、祖母に踊りや行事へ連れていかれた。1980年代には、白糠の保存会で踊りを始めた。」

【白糠町、青年層】

「母親や母方のおばあちゃんとアイヌ語教室に行ったりしていた。アイヌ文化には小さいころか

ら親しんでいた。小さいころから（小学校低学年）おばあちゃんに連れていかれてアイヌの踊りなどをしていた。アイヌ語も日常生活の中で自然に祖母や母が使っていたので、自分も意識せずにアイヌ語を使っていた。また、アイヌ三大祭りも幼いころに祖母に連れていかれていた。」

ここでいう「保存会」とは、おそらくウタリ協会白糠支部（現：白糠アイヌ協会）の婦人部（文化部）を母体として1984（昭和59）年に立ち上げられた古式舞踊（リムセ）を中心としたアイヌ文化の保存伝承活動を行う「白糠アイヌ文化保存会」のことであり、また、「アイヌ三大祭り」とは、先祖供養のためにカムイノミ・奉納舞踊がなされる「ふるさと祭り」（1979（昭和54）年～）、ししゃもの豊漁等を祈願するためにカムイノミ、イチャルパ、古式舞踊の奉納を行う「ししゃも祭り」（1980（昭和55）年～）、鯨（フンペ）によって飢えをしのいだとされる伝説から神の恵みに感謝する「フンペ祭り」（1996（平成8）年～）という「白糠三大祭」のことを指す（世良・小内 2015）。先の「アイヌ三大祭り」という言及は、開始年を考えると「ふるさと祭り」か「ししゃも祭り」に参加したことを意味しよう。

このように見れば、「民族復権運動高揚期」においては、「エスニシティ潜在期」に見られた文化が引き続き見られると同時に、「白糠アイヌ文化保存会」という組織や「ふるさと祭り」「ししゃも祭り」などの祭事を契機とした文化実践が見られたといえよう。

第3節 現在のアイヌ文化の実践内容

それでは、現在においてはどのようなアイヌ文化の実践がなされているのだろうか。そこで、インタビュー時点現在において、普段実践しているもしくは体験しているアイヌ文化、加えてインタビュー時点現在においては実践・体験されてはいないものの「アイヌ文化再興期」（1993年～現在）において行ったと判断できるアイヌ文化を見てみよう。それを表4-5に整理した。具体的には、インタビュー協力者の生活史において一定程度言及されるアイヌ文化を以下のように分類した。

- ・「宗教儀礼」：カムイノミ、先祖供養、イナウを捧げる、などの宗教儀礼
- ・「神聖な場所への祈りや夢見」：山などへの祈り、夢見を大事にすることなど
- ・「アイヌ語」：アイヌ語の学習や使用
- ・「歌、踊り、音楽、口承文芸」：歌と踊り、ムックリやトンコリ、口承文芸など
- ・「工芸（編物、刺繍、織物、木彫）」：編物、刺繍、織物、木彫など
- ・「料理」：アイヌ料理を作る、食べる

表4-5 現在におけるアイヌ文化の実践

	宗教儀礼	神聖な場所への祈りや夢見	アイヌ語	歌、踊り、音楽、口承文芸	工芸（編み物・刺繍・織物・木彫）	アイヌ料理	合計
むかわ町	22	3	19	15	17	13	61
札幌市	21	10	12	21	27	13	51
新ひだか町	18	3	10	13	15	9	57
伊達市	17	1	11	11	13	4	47
白糠町	20	13	25	25	18	19	48
むかわ町	36.1%	4.9%	31.1%	24.6%	27.9%	21.3%	100.0%
札幌市	41.2%	19.6%	23.5%	41.2%	52.9%	25.5%	100.0%
新ひだか町	31.6%	5.3%	17.5%	22.8%	26.3%	15.8%	100.0%
伊達市	36.2%	2.1%	23.4%	23.4%	27.7%	8.5%	100.0%
白糠町	41.7%	27.1%	52.1%	52.1%	37.5%	39.6%	100.0%

まず、「宗教儀礼」を見ると、5地域いずれでも20人程度の者が実践・体験している。その多くの場合、各地域のアイヌ協会や関連する文化団体が担い手となっていて行われる「組織」的な取り組みの中で、カムイノミ、先祖供養、イナウを捧げることなどが行われている。具体的には、むかわ町では「シシャモ・カムイノミ」（1986（昭和61）年開始）など、札幌市では「アシリチェプノミ」（1982（昭和57）年開始）、新ひだか町ではシャクシャイン法要祭、伊達市では「カムイノミ・イチャルパ」（1995（平成7）年開始）、白糠町では「白糠三大祭」（世良・小内 2015）などに参加していると言及する者が見られた。こうした実践には、祭司や副祭司として参加する者から、その準備などの「手伝い」をする形で参加する者まで多様な関わり方がある。とはいえ、このように見れば、現在のアイヌ文化のうち「宗教儀礼」は、アイヌの人々や文化に関連する「組織」を母体とした取り組みの中で実践されているといえよう。

ただし、こうした「組織」的な実践以外にも、個人が「日常」的に行っている実践も見られる。たとえば、

【むかわ町、老年層】

「簡単なイチャルパ（先祖供養）は家で3回くらいやったことがある」

【札幌市、老年層】

「朝太陽が昇ってくる方向に向かってイナウを吊ってある。今自分の自由にできる部屋があり、ヌサバ（ヌサ；祭壇）を作って、日が昇ってくる時にオンカミ（礼拝する）を3回する。イナウは自分で作っている。」

【新ひだか町、壮年層】

「イチャルパを行っている。お彼岸で3月と9月の年に2回、普通の形式とイチャルパ形式で先祖供養をやっている。新ひだかアイヌ協会で行うイチャルパは9月にある。」

【伊達市、老年層】

「（家庭の中で）イナウを捧げるとかは、ずっと続いてましたね。今もやってますよ。」

【白糠町、青年層】

「給料日とか（で感謝したくなったり）、自分で不安に思ったり何か気になることがあったりしたら、カムイノミする。」

のような言及が見られる。ただし、こうした「日常」的な実践を行っていると言及する者は、先にふれた「組織」的な取り組みに言及する者と比べて、多くは見られない。

このように見れば、現在におけるアイヌ文化の「宗教儀礼」的な実践は、主に各地域のアイヌ協会等の「組織」的な取り組みにおいてなされている一方、個人が「日常」的に行う取り組みも部分的に見られるといえよう。

次に、「歌、踊り、音楽、口承文芸」は各地域で11～25人、「工芸（編物、刺繍、織物、木彫）」は13～27人の者が「アイヌ文化再興期」において実践体験をしている。それは具体的には、各地域のアイヌ協会や関連する組織団体が行う「講座・教室」が契機となる場合や、文化保存団体の活動として実践されている。

【むかわ町、老年層】

「アイヌ文化関係団体には踊りの会もあり、それに所属している。」

【札幌市、壮年層】

「アイヌ刺繍の講座を4月から9月まで受けた。」

【新ひだか町、老年層】

「静内民族文化保存会に入って踊っているのでアイヌであることは意識する。」

【伊達市、老年層】

「伊達の支部（現：伊達アイヌ協会）で刺繍とか木彫りとか、そういうのをやる時に参加している。今年はトンコリを行うそうだ。」

【白糠町、老年層】

「約30年間白糠アイヌ民族保存会に参加し、踊りなどをしている。」

他方で、「アイヌ語」に関しては、各地域で10～25人ほどの実践が見られる。この場合でも各地域のアイヌ協会等の関連主体が行う「講座・教室」においてアイヌ語が学習されているようだ。

【むかわ町、老年層】

「今はアイヌ協会の催しでアイヌ語の勉強をしている。第2、第4金曜日に習っているが、なかなか頭に入らない。」

【札幌市、青年層】

「週に1回のウタリ協会（現：札幌アイヌ協会）で開かれていたアイヌ語勉強会に参加していた。」

【新ひだか町、壮年層】

「アイヌ語教室に去年まで出ていた。アイヌ語教室は月に4日、毎週木曜日とか、水曜日というように定期的に開かれていた。」

【伊達市、老年層】

「アイヌ語の講座は、昨年一昨年と行なってみた。」

【白糠町、老年層】

「現在、アイヌ語上級講座でアイヌ語を学んでいる。」

ただ、「アイヌ語」に関しては、こうした形以外での実践が行われているようだ。たとえば、大学でアイヌ語を学んだり、本などを参考にして独学でアイヌ語を学ぼうとする者などの「学習」を行う者が見られる一方、「日常」的に単語レベルでアイヌ語を使う者が存在している。たとえば、アイヌ語の単語は今でもよく使う者、人に文句をつける時に「チャランケ、チャランケ」など普段何気なく気づかないでアイヌ語を使っていることがある者、会話の中でアイヌ語の単語が入る時がある者などがいる。

このように見ると、「アイヌ語」は、「講座・教室」において「学習」される形態を持ちつつ、同時に「日常」で単語レベルでの実践が個人的になされてもいよう。

続けて、「アイヌ料理」を見ると、地域によってはここでも「講座・教室」という形で実践がなされているようだ。また、先にふれたカムイノミ等の「宗教儀礼」を行う際、アイヌ料理が出される場合が見られ、そうした「宗教儀礼」の実践に伴って「アイヌ料理」がなされてもいる。

【むかわ町、青年層】

「料理も覚えてみたいと思う。料理教室には2回参加した。」

【札幌市、壮年層】

「料理をサッポロピリカコタン（札幌市ホームページ参照）で教えたりしている。」

【新ひだか町、老年層】

「シャクシャイン法要祭ではお料理を作るのを手伝ったりして、行事があるときには必ず裏方の手伝いをしている。料理は手伝っているうちにだんだん覚えた。」

【伊達市、壮年層】

「カムイノミ・イチャルパの時に、初めてアイヌ料理であるキビナゴ入りのご飯とかを食べた」

【白糠町、壮年層】

「白糠三大祭りでアイヌ料理を作る関係で、料理もすることもできる」

このように見れば、「アイヌ料理」は、「講座・教室」や「組織」的取り組みを契機として実践がなされている側面がある。

ただし、「アイヌ料理」は、個人が「日常」的に行っている場合もそれなりに見られる。たとえば、アイヌ料理が好きでシト(米の団子)を妻に作ってもらいと述べる者、盆暮れにシトやコンブシト(昆布だれ団子)を作ると述べる者、ラタシケブ(煮物や和え物)が小さいころから好きで今は家庭で子どもたちに作ると述べる者、普段の夜ご飯でも祭りの際に出すアイヌ料理を真似したものを出すことがあると述べる者などがある。こうした側面は、

【むかわ町、壮年層】

「料理にしてもこういうふう料理するというのは普通に家で作ったり食べたり、家の家庭料理として受け継いで来ているだけで、アイヌ料理としては見ていない。」

と述べる者がいるように、アイヌ文化というより「家庭の味」という意味の方が主観的には強いのかもしれない。また、

【新ひだか町、壮年層】

「好きな食べ物では芋シトがある。芋を越冬させて、皮をむき、水でさらしてでんぷん質にして、それを固めて団子状にして干す。保存食になる。祖母が教えてくれた。今は自分でイモを植えて、イモが余ったら放置しておいて作っている。以前はでんぷんだけで作っていたので、冷えると硬くなり食べられなかったが、現代風に白玉やホットケーキの粉を混ぜて、冷めてもやわらかくできるように工夫して子どもたちに食べさせている。子どもたちには「昔の人の食べ方なんだよ」と説明して教えている。」

と述べる者がいるように「現代風」のアレンジを行う者もいる。とはいえいずれにせよ、個人が「日常」的に行うという形でも、アイヌ料理の実践がなされている。

最後に、「神聖な場所への祈りや夢見」では、これまで見てきたような「組織」や「教室・講座」において実践されるという形は見られず、個人が「日常」的にもしくは「特定の場面」で行っている。

【むかわ町、老年層】

「山菜採りが好きなので、山に入る時は必ずお参りしてから入るようにしている。採り終わった時には「ありがとうございます」と言って帰ってくる。」

【札幌市、老年層】

「川や山などの神聖な場所にお祈りに行くことは多い。A山には年に何回もあがっている。」

【新ひだか町、壮年層】

「父親が小さい頃から言っていたので、夢見は大事にする。たとえば、父親はこの夢を見たら熊を獲るとか、夢見が悪かったら何かをしないと、死んだ人の夢を見ると何かやっていた。」

【伊達市、青年層】

「父親と一緒にキノコ取りや山菜取りのため山に行く時は、山にお酒をあげてアイヌ語で「ごによごによ」と言っているのは聞きます。」

【白糠町、老年層】

「海や川、山でのタブーとして、必要な分以外はとらず、自然を大切にする、というアイヌならではの意識がある。また、ペネップ（アイヌのお守り）というアイヌの魔除けの木の芯のようなものを、普段から大事に身につけている。夢見も大事にしており、そのことは昔から言い伝えられている。」

ただこうした「神聖な場所への祈りや夢見」は、各地域で1～13人とこれまで見てきたアイヌ文化の中で言及する者が少なくなっている。再度、表4-3に戻り2008年のアンケート調査の結果を見ても、「神聖な場所への祈り」「海・川・山でのタブーや約束事」「夢見を大事にする」は、「伝統的な先祖供養」や「イナウを捧げる」よりも「現在も実践している」者が少ない。とはいえ、「神聖な場所への祈りや夢見」は、個人が「日常」的にもくしは「特定の場面」で行うという形で実践がなされている。

なお、現在におけるアイヌ文化の実践の中で、上記の分類に当てはまらない特徴的な実践として、まず、札幌市においては「現代に生きるアイヌとして、版画やロック、語りなど様々な形でアイヌ文化を表現する」「アイヌ・アート・プロジェクト」(Indigenous Work and Artのホームページ参照)に参加する者や、その取り組みを見たと言及する者がいた。他方で、白糠町では伝統的な漁具であるマレク（突き鉤）でサケ漁を行おうと取り組む者もいる。このような上記の分類に当てはまらない文化実践が存在していることにも注目していく必要がある。

おわりに

以上、「エスニシティ潜在期」「民族復権運動高揚期」「アイヌ文化再興期」のアイヌ文化の実践内容について検討してきた。最後に、過去のアイヌ文化の実践と比較しながら、現在におけるアイヌ文化の特質について考察を加えてみよう。

まず、第1に、アイヌ文化のうちカムイノミ・先祖供養・イナウを捧げることなどの宗教儀礼的な実践は、アイヌ協会やそれに関連する団体が組織的に行うものが主要な形となっているという意味で質的な変化が見られる。宗教儀礼的なアイヌ文化は、とくにむかわ町・新ひだか町・白糠町の「エスニシティ潜在期」においては日常生活の中でなされており、その意味で特別な実践とはいいがたかった。しかし、現在における宗教儀礼的なアイヌ文化は、組織的な取り組みを背景に定期的になされるという意味で日常生活とは異なる特別な実践といえよう。実際、むかわ町のインタビュー協力者は、イナウを捧げることや神様にお祈りをするのは年に数回しかないが特別なことではなく、

特別なものとして見るのは今だからだと述べていた。

白糠町のインタビュー協力者は、子どもの頃に体験したカムイノミに言及する中で「毎日行うのと特別な日にやるカムイノミで違うらしい」と述べている。その意味で、現在のアイヌ文化における宗教儀礼は、「特別な日」に行うという形で実践されているといえるのかもしれない。

しかし、こういった宗教儀礼を、日常生活の中で実践している者も一定程度見られた。具体的には、ヌサを作って毎朝礼拝をする者、感謝したい場合や不安を感じた場合にカムイノミをする者などがいたのであった。その意味で、こうした「毎日行う」宗教儀礼の実践も行われている点には留意する必要がある。

次に、第2に、「歌、踊り、音楽、口承文芸」や「工芸（編み物・刺繍・織物・木彫）」は、それに関する教室や講座を契機とした実践がなされていた。そして、こうした教室や講座は、アイヌ協会やそれに関連する文化団体が主な主体となっていて行われていた。その意味で、こうした「歌、踊り、音楽、口承文芸」や「工芸（編み物・刺繍・織物・木彫）」などのアイヌ文化は、関連組織やその取り組みを背景としつつ、「学習」されながら実践されているといえよう。

さらに、第3に、アイヌ語に関しても、アイヌ協会などの組織を背景に教室・講座という形で「学習」されていた。しかし、アイヌ語は、一方で大学や独学で学ぶという形でも実践されているだけではなく、個人が日常的に単語レベルでの実践を行っていった。すなわち、会話の中でアイヌ語が入る者などが存在していた。こうした単語レベルのアイヌ語実践は、とくに「エスニシティ潜在期」においてアイヌ語話者が次世代への伝達を避けようとしたものの、結果的には（必ずしも日常使用する言語としては十分なものとはいえないかもしれないものの）現在にまで伝達された文化実践といえるかもしれない。その意味で、「アイヌ語」には、組織的な取り組みを背景とした「学習」という形態と、世代的に伝達された「日常」的な単語レベルでの実践という形態が見られよう。

続けて、第4に、アイヌ料理に関しては、教室・講座という形での実践、先にふれた組織的な宗教儀礼にともなってなされる実践、個人が日常的に行うという形での実践が見られた。個人が日常的に行う場合には、家庭の味として上の世代から受け継いだという意味付けをしていた者が見られたように、「エスニシティ潜在期」「民族復権運動高揚期」を通して家庭に受け継がれてきた性格を持つといえよう。その意味で、アイヌ語と同様に世代的に伝達された「日常」的な実践であるといえるかもしれない。

さらに、第5に、「神聖な場所への祈りや夢見」は、これまで見てきたアイヌ文化実践とは異なり、個人が日常的に行うという形態で主に実践されていた。その意味で、こうした文化は、「エスニシティ潜在期」「民族復権運動高揚期」を通して伝承されてきた性格を持つともいえる。ただ、こうした文化実践は、他の文化実践と比べて実践している者が少ないと考えられた。

以上のように見れば、現在におけるアイヌ文化の実践には、宗教儀礼的な実践の質的な変容、歌や踊り・工芸など文化的な実践の学習、アイヌ語とアイヌ料理の学習と継承、神聖な場所への祈りなどに関する個人的日常的な実践という特質が見られるといえよう。

では、今後、再興されつつあるアイヌ文化の内実はどのようなものになっていくだろうか。そこでは、基本的には、先に確認した現在のアイヌ文化の特質のうち少なくとも1つ以上のものが重要な位置を占める可能性が高い。ただ、札幌市では版画やロックを通してアイヌ文化を表現しようとする試み、白糠町では伝統的な漁具で漁労を行おうとする試みなどの動きも見られる。その意味で、

再興されつつあるアイヌ文化のゆくえは必ずしも確定的なものではない。このように見れば、現在のアイヌ文化の特質をどのように評価するのかという点が重要な論点となるのかもしれない。そうした評価のあり方によって、アイヌ文化のどのような内容をどのような形で再興させていくのかという展望のあり方が異なってくるからである。

とはいえ、いずれにせよ、現在のアイヌ文化が持つ特質を明らかにすることは、アイヌ文化の再興の動きを理解する上で、不可欠に必要なことだといえるのではないだろうか。

参考文献

- 東村岳史, 1995, 「アイヌ民族復権運動前史: 「空白期」の理解をめぐって」『国際開発研究フォーラム』3, 19-30.
- 小内透編著, 2012, 『北海道アイヌ民族生活実態調査報告 その2 現代アイヌの生活の歩みと意識の変容—— 2009 年北海道アイヌ民族生活実態調査報告書——』北海道大学アイヌ・先住民研究センター.
- 札幌市, 2010, 『札幌市アイヌ施策推進計画』(http://www.city.sapporo.jp/shimin/ainushisaku/sakutei/documents/keikaku_honbun.pdf).
- 札幌市教育委員会, 2008, 『アイヌ民族の歴史・文化等に関する指導資料——第5章——』(http://www.city.sapporo.jp/kyoiku/top/education/ainu/ainu_minzoku.html)
- 世良尚也, 2016, 『アイヌ多住地域におけるアイヌ文化実践の現状と未来——新ひだか町、伊達市、白糠町』北海道大学大学院教育学院修士論文
- 世良尚也・小内透, 2015, 「アイヌ文化の実践環境と文化の担い手」小内透編著『調査と社会理論・研究報告書 33 白糠町におけるアイヌ民族の現状と地域住民』北海道大学大学院教育学研究院教育社会学研究室, 83-98.
- 上山浩次郎, 2014, 「アイヌ文化の経験の多様性とその分化要因」小内透編著『北海道アイヌ民族生活実態調査報告 その3 現代アイヌの生活と意識の多様性—— 2008 年北海道アイヌ民族生活実態調査再分析報告書——』北海道大学アイヌ・先住民研究センター, 45-90.

インターネット資料

- 公益財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構のホームページ <http://www.frpac.or.jp/>
- 札幌市のホームページ <http://www.city.sapporo.jp/shimin/pirka-kotan/index.html>
- Indigenous Work and Art のホームページ <http://www.i-w-a.info/>

(上山浩次郎・世良 尚也)